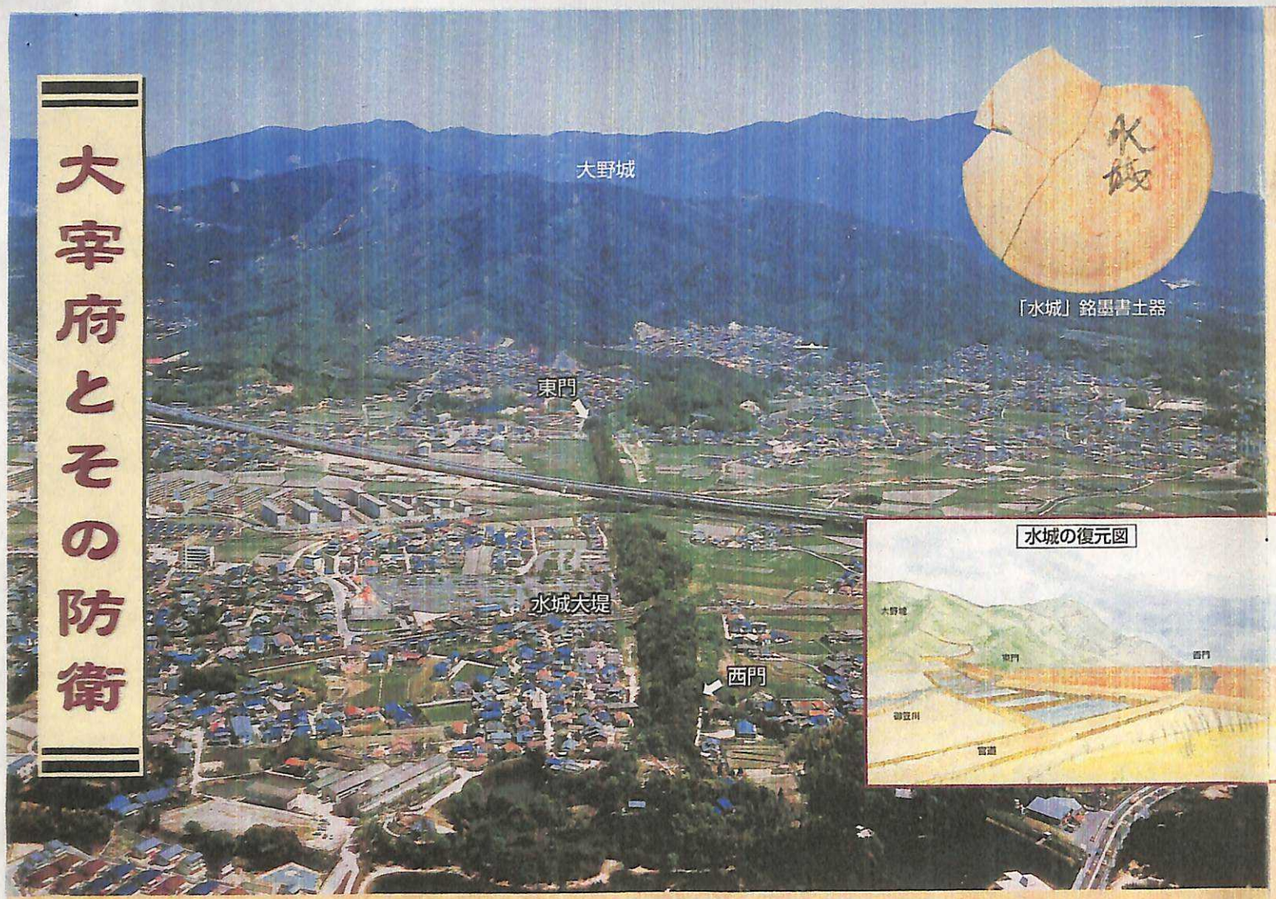
大宰府とその防衛



水城大堤と小水城

水城大堤

再び、『日本書紀』の記事。「筑紫に大堤を築きて水を貯えしむ、名づけて水城という」は、現在では、博多湾前面に広がる福岡平野の最も奥をさえぎるように横たわる全長1.2km、基底部分の幅約80m、高さ10m以上の長大な人工の盛土による土塁（土手）を指しています。通称‘水城大堤’は、太宰府市と大野城市の境界を兼ねていますが、平野を横切る御笠川の通過点のみいったん土塁が途切れています。また、土塁の東西の端に近い個所にそれぞれ東門、西門が設けられています。近年の西門跡の発掘調査では、門自体は２回の建て替えがされていることが確認され、この門を通過する幅約10m前後の官道の跡が、太宰府市、大野城市、春日市など数カ所で発見されています。

さて、名前の由来を指すと思われる「…水を貯えしむ…」については、これまでの発掘調査で、土塁の外側に平行して幅約60mの外濠の存在がほぼ定説となっていますが、外濠に土塁の内側（上流）で集めた水を流し込むための木製の導水管が今まで水城大堤の３ヵ所で確認されています。これが木樋と呼ばれるもので、土塁の基底部分の盛土の中に少なくとも80mにわたって埋められていることになります。1300年以上のあいだ、土塁の下で導水管は、腐らずに残っているようですが、一部は江戸時代頃に土塁を掘抜いて、持ち去られていることも確認されています。

大野城跡から水城大堤と小水城の方向をのぞむ

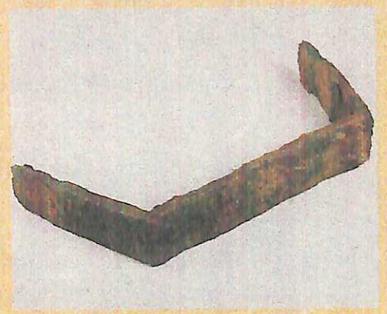
小水城

水城大堤の西側に目を向けてみると、大野城市の牛頸山から延びてきた低い丘陵地帯が広がります。一帯は大小数々の谷間が複雑に入り込みますが、いくつかの大きな谷間は迂回して東側に侵入すると、大宰府を襲うことが可能です。

現在までに大野城市から春日市の間の数カ所で、見た目にもこじんまりとした土手状の高まりが谷間によこたわるように存在します。大野城市上大利、春日市大土居・天神山などの各土塁がいわゆる小水城と呼ばれる土塁跡です。これまでの各地での発掘や研究で水城大堤と３ヵ所の小水城は一連の遺跡であることがほぼ証明されており、国の特別史跡『水城跡』に指定されています。

水城大堤木樋の底板

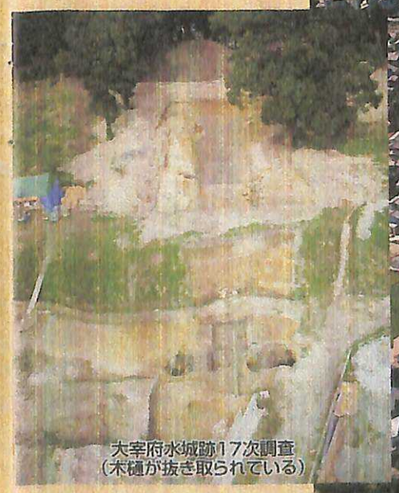
水城大堤 木樋取水部

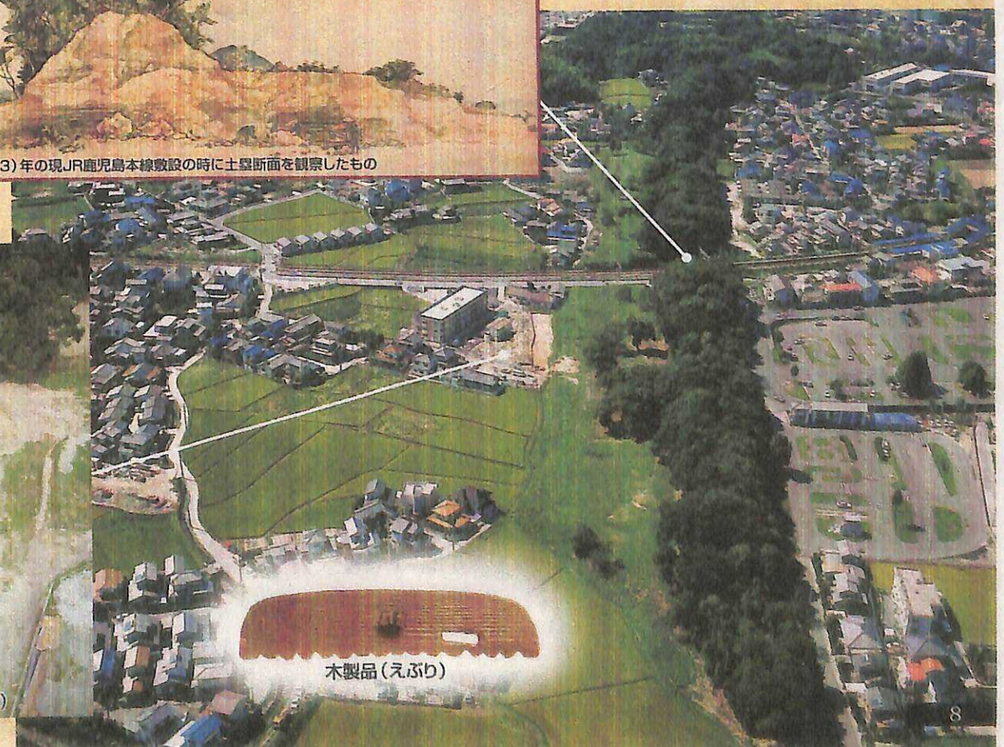

底板をつなぐ鉄製カスガイ

その他に、周辺にはいくつかの小水城が推定されています。また、基肄城が存在する大宰府の南側にも佐賀県基山町の関屋・とうれぎの各土塁、久留米市の上津の土塁なども小水城と考えられています。

『筑前国大宰府水城の一部切堀図』

大正2（1913）年の現JR鹿児島本線敷設の時に土塁断面を観察したもの


大宰府水城跡17次調査
（木樋が抜き取られている）



春日市周辺の小水城

水城大堤の西側にひろがる低い丘陵地帯の谷あいに、現在までに５ケ所の小水城が知られ、うち４ケ所は春日市内に分布します。

大土居と天神山の小水城は、国特別史跡『水城跡』に指定され、現地で保存されています。残念ながら、他の推定される春日・小倉の小水城と、実はもう１ヵ所土塁が推定される天神山の一部は、周囲が住宅地となり、半ば地下に埋もれたままとなっています。

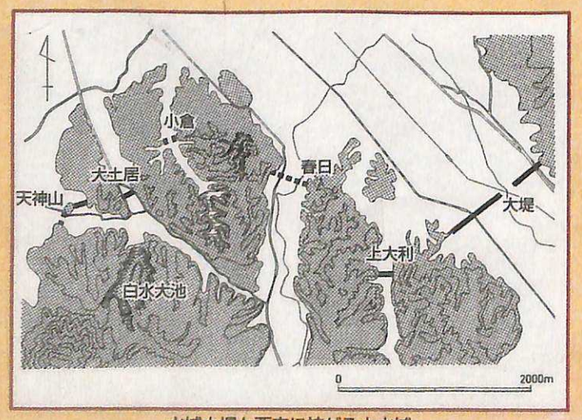
大宰府とその防衛施設という壮大なスケールの文化遺産は、これらの忘れ去られそうな小水城を掘りおこし、将来にわたって残していかなければならないと思います。

大土居水城跡周辺（昭和53年空撮）
県道によって土塁の途中が切り通されている。県道の東側で約75mの土塁が残るが、これまでの発掘調査で県道の地下と西側にも土塁が確認されているので、築造時の長さは120m以上だったと推定される。

大土居水城跡土塁の断面
県道すぐ西側の切り通し部分で、土塁の外側が2段になっているのがよくわかる。この切り通しから20m程西側で人工の土手部分はなだらかな丘陵の裾に取り付くと考えられる。

天神山水城跡（昭和53年空撮）
周囲の水田部分から浮島状に見える丘陵の東側に、東西方向に走る土塁が約70mにわたって残る。丘陵の南側にも南北方向の土塁が推定されるが、発掘調査ではまだ確認されていない。

天神山水城跡土塁の断面
市道によって土塁横断面の上部が切り通されている。見た目の規模は、高さ約3m、幅約20mだが、大土居の発掘成果から推定すると、土塁の基底部は地下に埋もれていると考えられる。



水城大堤と西方に拡がる小水城

推定小倉水城周辺の現在
春日市スポーツセンター下の通りをはさんで東西に土塁が走ると推定される。写真向かって左側の住宅地の並びが帯状に一段高くなっているのが、土塁の名残りと考えられる。

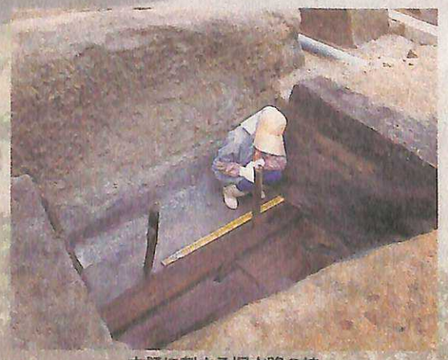
推定春日水城周辺の現在
春日神社参道沿いに土塁が推定される。微妙な起伏を表現した昭和はじめ頃の地形図をみると、細長い帯状の高まりで記されている。写真は東側から神社の参道側を見る。

その後の大土居水城跡

木樋の発掘調査では、思わぬこともわかりました。木樋のちょうど真上から、一昔前の用水路の跡が溝状に発見され、水路の土留めの木杭が多数木樋の底板に突き刺さっていたのです。さらに、木樋の方向と横断する土層の調査では、この水路跡と底板との間にも水が流れた痕跡が観察され、しかも底から伊万里焼などの陶磁器が多数出土しました。それからすると、木樋とその周囲の土塁は江戸時代頃には開削されて水路がつけられていたようです。遺跡の破壊は、案外古くから行なわれていたようです。

県道がつくられた後の水路はかさ上げされ、現在も歩道下を流れていますが、その水源は白水大池という溜め池です。白水大池については、江戸時代のはじめ頃に下流の田畑をより潤すために、土手の改修工事が行なわれた記録が残っています。周辺の水路とともに江戸時代以前から存在していたようです。また、土手の崩壊も幾度かあったことも記録されており、下流もふくめてその被害によって水路の補修工事がたびたびあったことも想像されます。

白水大池が古くはいつ頃からあったかは、記録からはこれ以上さかのぼれませんが、発掘調査の時に遺跡周辺の土砂を採取して、科学的分析によって、周辺の植生などの環境を調べてみたところ、周辺に水田と照葉樹林がひろがっていたことが考えられています。水城が築かれた頃より水田耕作が行なわれていたと仮定すると、上流の溜め池や水路は意外と古くから整備されており、木樋はその地域において水利の重要な幹線もはたしていたのではないかと思われます。



木樋に刺さる旧水路の杭

旧水路跡と杭

白水大池

平成28年　12月3日（土曜日）・4日（日曜日）

新発見　大宰府を守る土塁

前畑遺跡第１３次発掘調査　現地説明会

筑紫野市教育委員会　文化情報発信課

１．発見された土塁（どるい）

筑紫駅西口土地区画整理事業に伴い実施している前畑遺跡の発掘調査では、弥生時代前期～中期の集落、古墳時代後期の集落と古墳群、窯跡、中世の館跡、近世墓などが発見され、遺跡が長期間にわたって形成されてきたことがわかりました。

今回の丘陵部での調査では、７世紀に造られたと考えられる長さ500メートル規模の土塁が、尾根線上で発見されました。

２．土塁の構造

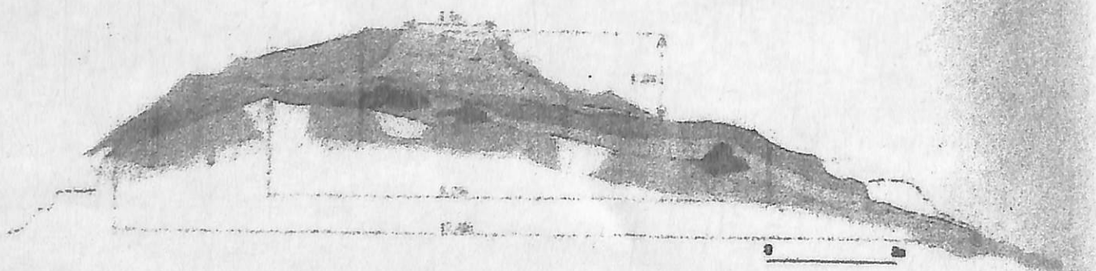
土塁は大きく上下２層から成り、上層の外に土壌を被せた構造です。上層は種類の異なる土を層状に積み重ねた「版築」（はんちく）と呼ばれる工法で造られています。このような工法は特別史跡の水城跡（みずきあと）や大野城跡（おおのじょうあと）の土塁の土壌にも類似しており、７世紀後半に相次いで築造された古代遺跡に共通した要素と言えます。

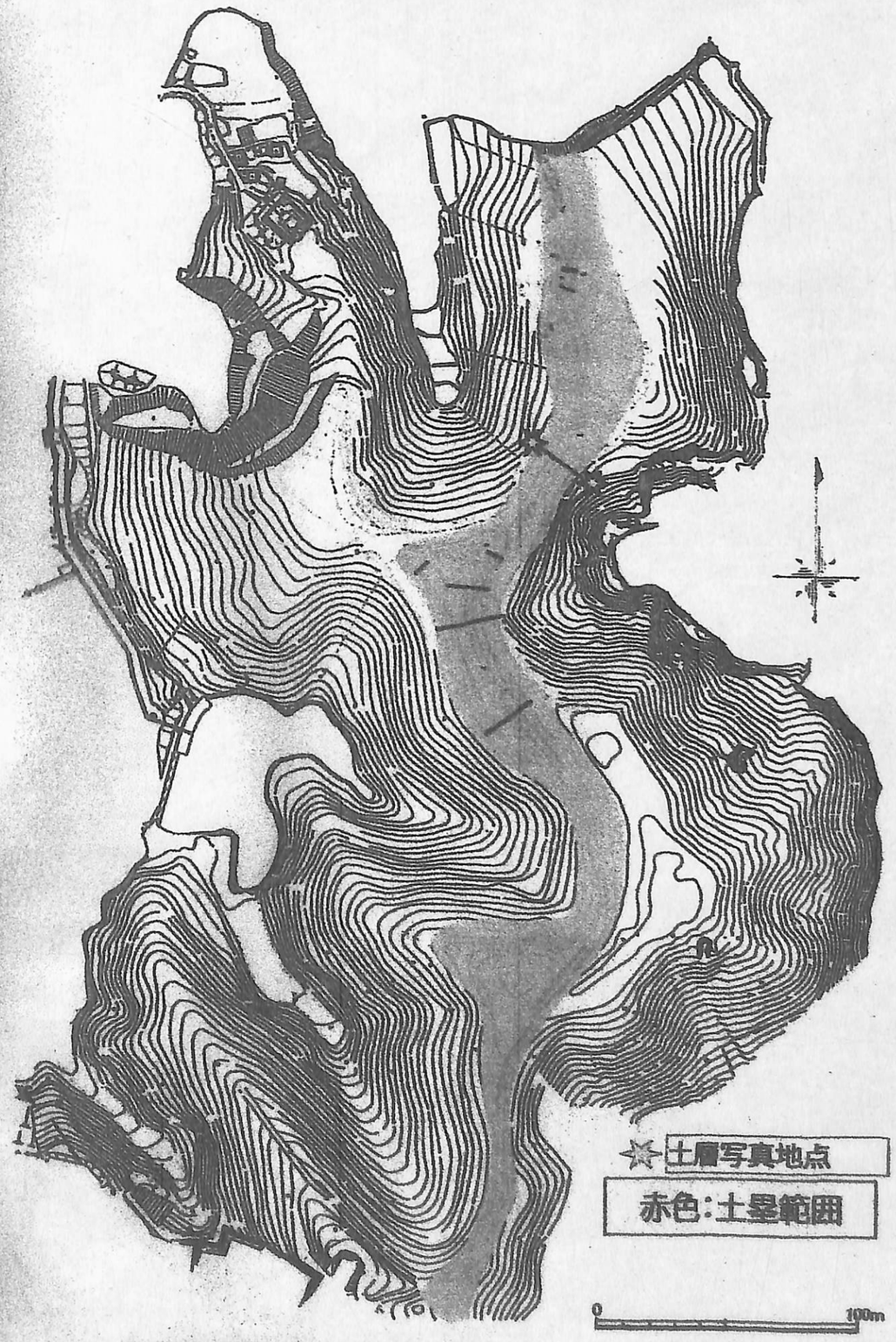
ただ、すでに知られている水城や小水城、とうれぎ土塁、関屋（せきや）土塁といった７世紀の土塁は、丘陵と丘陵の間の谷を繋ぎ、敵の侵入を遮断する目的で作られた城壁としての機能が想定されています。

今回、前畑遺跡で発見された土塁は、宝満川から特別史跡基肄城跡（きいじょうあと）に至るライン上に構築されたもので、丘陵尾根上に長く緩やかに構築された、中国の万里の長城のような土塁となっています。

また、土塁の東側は切り立った斜面になっており、西側はテラス状の平坦面を形成しています。これは東側から攻めてくる敵を想定した構造で、守るべき場所、つまり大宰府を防御する意図を持って築かれたと考えられます。

（東）　（西）





前畑遺跡第13次発掘調査 土塁範囲図